

「拓兵主御立腹ニテ赤国（朝鮮国全羅道）ヨリ引足ニ長倉甚兵衛、河崎又右衛門ヲ切腹、川崎駿河（清武城主）、川崎兵右衛門、（弟の権右衛門も）ハ永ノ暇ヲ賜り、大坂へ出奔、伊東平右衛門ハ日向国外浦ニテ上意討トナル」

四 日本の軍勢が朝鮮から略奪し 持ち帰ったもの

七年にも及ぶ戦争で、朝鮮全土は踏み荒らされ、農民は耕すことも種をまくこともできなかつた。僅かに残った食糧も日本軍勢に略奪された。おまけに明国からの救援軍の兵糧も負担しなければならなかつたこともあり餓死者が続出した。

鍋島直茂の従軍僧是琢は「朝鮮人」男女・牛馬・同処に死骸を晒すといえども、これを収める人なくして、臭気天をおおい地をふさぐ」と記載している。

韓国中学校の教科書には、その略奪と狼藉を「倭奴は目の粗い櫛、中国奴は目の細かい梳き櫛」という言葉が生まれたと記載している。

すさまじい人買い

日本に連行された人数は五、六万人と推定されている。また、明国軍も朝鮮国からの帰国に際し、多数の朝鮮人婦女子を本国に連れ去った。

その例を挙げると、

★「高橋勢往來の度毎に朝鮮国の男女老若を撰ばず生捕来て奴僕とす、其数何百人という事を知らず。然る中にも幸いなる女は人の妻妾となり、男は主人に隙を得て妻子を設て籠を立てるもの多し。長命なる（者）は慶安、承応の末まで存命にて其子孫今に多し」

（延陵世鑑）

★ 日本より来た商人の中に、人商いするものあり。男女老若を買い、縄で首をくくり、杖で打つ姿は阿防羅刹（地獄の獄卒）の罪人をせめるがごとし」

（「朝鮮日々記」）

★ 軍勢、商人は朝鮮人を捕虜として日本に連行した。これは日本各地から朝鮮侵略に根こそぎ動員されたため耕作地が放棄された。これを朝鮮人捕虜で労働力不足を補った。

（加藤清正の家来福田勘助の供述）

★ 南蛮船で長崎に来たイタリア人旅行家のフランチェスカ・カルレッティは、朝鮮から送られてくるおびただしい奴隷の中に可憐な子供までいて、驚くほど安い値段で売られていると記録している。

東南アジアのマカオ、インドのゴアなどの奴隷市場には朝鮮人奴隷が氾濫した。その理由は日本の軍勢が莫大な利益をもたらす奴隷の供給源を朝鮮に求めたことであつた。

焼き物戦争

特に慶長の役では、出陣した諸大名が多くの陶工を連れ帰ったことは周知のことであり、西日本各地から出陣した大名は領内に窯を築かせて、陶器や磁器を作らせた。

陶工を連れ帰った理由は茶の湯の流行にあつた。また当時は朝鮮の高麗陶磁が珍重されてもいた。

唐津焼は佐賀の鍋島直茂が陶範丘という陶工とその家族三十に、名護屋の白鷺山に窯を築かせたのが始まりとされている。

この唐津焼のほかにも、鍋島氏と有田焼、黒田氏と上野焼、高取焼、島津氏と薩摩焼、毛利氏と萩焼があげられる。

（延岡）から出陣した高橋元種も陶工を引き連れて帰国し、小峰（延岡市）、庵川（門川町）で窯を開かせるが、高橋氏の改易になるなどの政変で窯業は成功しなかつた。

文化財

書籍、仏画、仏像、金属活字などが日本に持ち帰られた。ここでは伊東祐兵の持ち帰った朝鮮鐘について触れる。

この朝鮮鐘は国の重要文化財に指定されている。重要文化財

鐘(朝鮮)一口 神奈川県 今淵せつ

銅 铸造 総高四十四・〇センチ

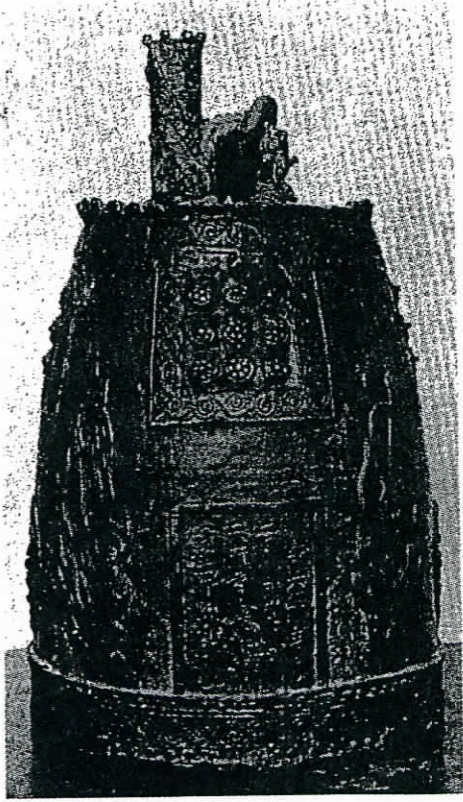
口径二十七・〇センチ

高麗時代(金・承安六年・一二〇一年)

この朝鮮鐘について、幕末・維新の儒学者大槻磐溪は、「この鐘は飢肥藩祖恩公(報恩公)伊東祐丘(兵)が征韓役の戦利品と伝えられていて」と鑑定している。

この朝鮮鐘(写真参照)は、鐘の最上部分の竜頭には玉を持った竜が口を大きく開き、笠形という部分には雲と天女が描かれ、乳の間には雲に縁取られた四角の中に九つの花が刻印され、帯には首をもたげた竜、守宮(トカゲ)がまとわる模様が描かれている。

朝鮮鐘



この朝鮮鐘は伊東家が代々所有していたものの、昭和十一年五月に東京美術倶楽部で競売にかけられ、当時は国宝に指定とされていた。この朝鮮鐘の落札価格は二万三千九百だったそうである。その後、この朝鮮鐘は飢肥城歴史資料館に購入話が持ち込まれたものの、業者の言い値は三億円と高額であったため、商談は成立しなかった。

数年前も広島県の安国寺恵瓊のゆかりの寺から仏画の曼荼羅が発見されたと伝えられていることから朝鮮から持ち帰った文化財が日本各地に埋もれていることに疑いはない。

その他

また、動植物としては、佐賀平野に見ることのできるカササギ(勝鳥)は、佐賀の鍋島直茂が朝鮮半島から持ち帰り、繁殖したものである。また、熊本の加藤清正が持ち帰ったつじも有名である。

まとめ

日本武将のトラ退治、城攻めなどの勇ましい話だけに目を奪われがちだが、文禄・慶長の役では朝鮮に多大な惨禍をもたらした。

七年にもおよぶ戦争は、朝鮮の国土を荒廃させ、人口も減少させ、立ち直るのに百年もかかったと言われるほどである。

朝鮮救援に軍勢を派遣した明国も、国家財政が苦しくなり、国力が衰え、五十年後清国に滅ぼされている。

慶長の役後の日本は、豊臣政権の内部での武将間の対立が激しくなり、二年後の慶長五年(一六〇〇年)に起こった関ヶ原の戦いで、徳川家康の掌中へと政権が移っている。

戦渦に目を向けることが大事だと考える。文禄・慶長の役でのいくつかの合戦に触れる。

● 文禄元年四月十三日・釜山城攻め

「日本の軍勢が釜山城内に攻め入った」

みな手を合わせひざまづき、聞きもならわぬから言、マノウマノウと言ふ事は、助けよとこそ聞こえけれ。それをも味方は聞きつけず、切りつけ、打ち捨て、ふみ殺し、これが軍神の血祭り、女男も犬猫も、みな切り捨てて、切り首は三万程とぞ見えにけり」

(松浦鎮信の家臣吉野甚五左衛門)

● 四月二十日、加藤清正の慶州攻めでは、

「討ち取る首数、都合千五百五十二なり。城中、城外ことごとく燃え上がり、三万軒に余りし家数、一日一夜に残らず炎上」とある。

新羅時代からの古い由緒をもつ仏国寺もこの時、焼失したのである。また、「男女・牛馬、何処に死骸をさらすといへども、これを収める人なくして、臭気天をおおい地をふさぐ」ともある。

日本軍勢の平壤撤退では、「手負い・病者は捨ておかれ、さかしき者も人により、ただこれ程の疲れにて、道には伏す人もあり。是れさえ先に落ちければ、力なくして身も疲れ、親を討たれる人もあり、兄を討たれる人もあり。」

寒国なればひた寒に、氷もあつく雪深し。手足は雪にやけはれて、生きものはよろいの下ばかり。さも美しき人なども山田のかしとおとろえて、あらぬ人かとも見も分かず」とある。

● 慶長二年八月十五日、南原城の戦い「城内の人数、男女残りなくうちすて、いけ取物はなし。夜明けて城の外を見て侍れば、道のほとりの死人いさご(砂)のごとし。眼もてられぬ気色也」と残酷な殺戮が繰り返されている。

● 慶長四年十月の泗川新城の戦いを、島津家記は「明・朝鮮軍三万三千七百人を討ち取り、城外に二十間の大穴を掘って埋めた」と書き、この死体から鼻をそぎ取り、塩漬けにして日本に送った

とある。

● 耳塚

文禄の役では日本の合戦の風習に従って首が送られていたが、慶長の役になると首の代わりに鼻を送ることになる。

これが悲劇を増加させたのである。鼻では戦闘員か否か、男か女かを見分けられないのの良いことに、どれだけ鼻を取ったかという量が問われるようになったのである。

「男女・生子(赤ん坊)まで残らずなで切に致し鼻をそぎ、その日々に塩に致し」

(加藤清正の武将本山豊前守の戦功覚書)
慶長二年の鼻の請取り状によれば、八月末から十月初旬までの二ヶ月間足らずの間に日本に届いた鼻は三万にも達している。

これらの鼻を埋めて耳塚と称しているのが、京都の豊国神社近くの「耳塚」なのである。

● 結論です。

歴史とは過去を照らす鏡だと言われます。鏡という文字のついた歴史書は枚挙にいとまがありません。

大鏡(八五〇〜一〇二五年、藤原道長を中心とする栄華、鏡物の第一話)。

今鏡(平安末期、大鏡以降約百五十年、藤原氏、村上源氏を中心に、宮廷貴族)。

水鏡(平安後期の成立、神武天皇から仁明天皇まで、天皇の事跡)。増鏡(南北朝に成立。後鳥羽天皇から後醍醐天皇)、吾妻鏡(鎌倉幕府の事跡)。

後鏡(室町時代に成立)。

また、「先行き不透明なときは歴史を振り返れ」とも言われますが、それは今、生きている私たちが過去の歴史の上

に位置しているからです。過去に人々が歩いた道を検討することが、将来を見通す視点となると考えます。

歴史を学ぶということは、学んだ経験則を生かし、ふたたび過ちを繰り返さないという未来を見る力、判断力を育む事ではないでしょうか。

書籍を紹介します

「日向記」、「日向纂記」※

「太閤秀吉と名護屋城」(鎮西町が出している)

「朝鮮日々記を読む」(宝蔵館)

「日本人は歴史から何を学ぶべきか」※(大和田哲男三笠書房)

※は県立図書館にもあります。